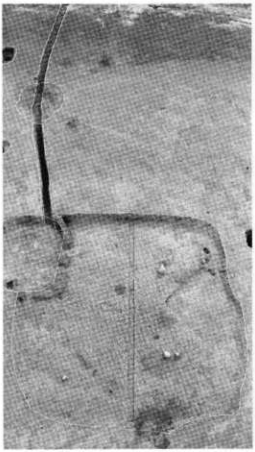
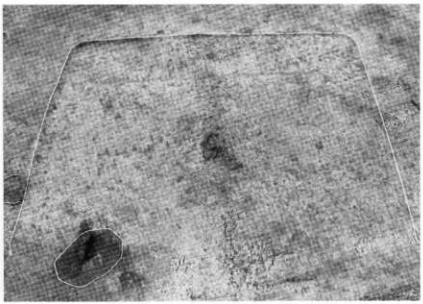
図　　版

（1992年度）

尾高御建山遺跡全景（東より）

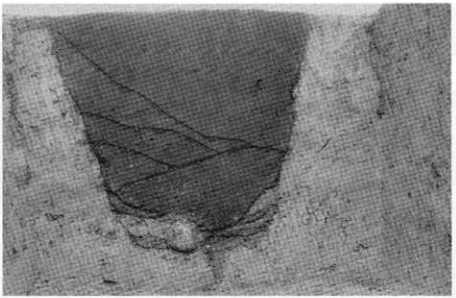


ＳＩ-02完掘状況（北東より）

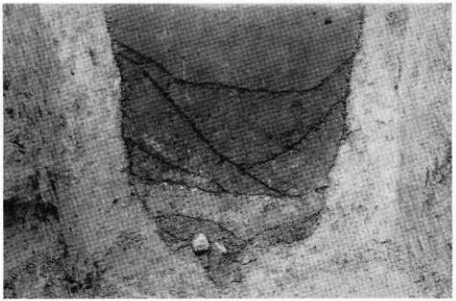


ＳＩ-03完掘状況（北より）

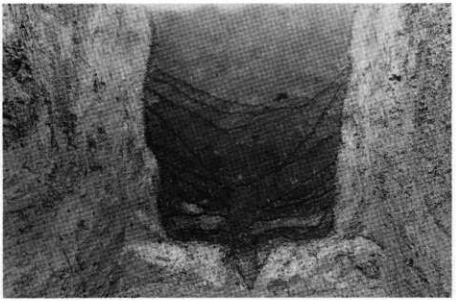
図版 2



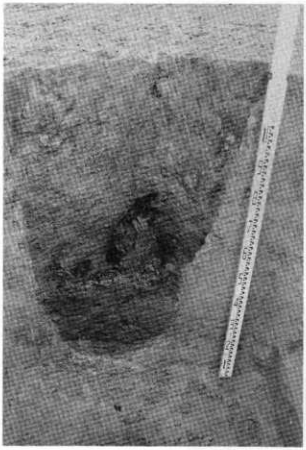
ＳＫ-37断面
（南より）



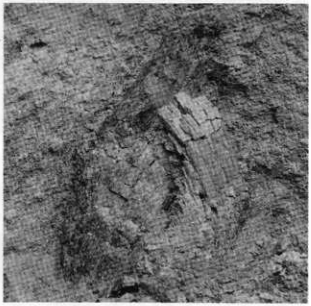
ＳＫ-38断面
（南より）



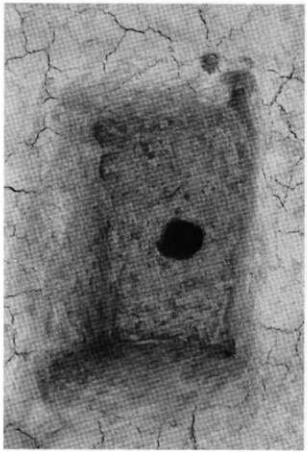
ＳＫ-40断面
（南より）



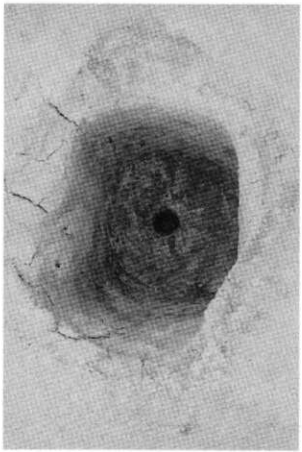
ＳＫ-39炭化木検出状況（南より）



（同左）拡大

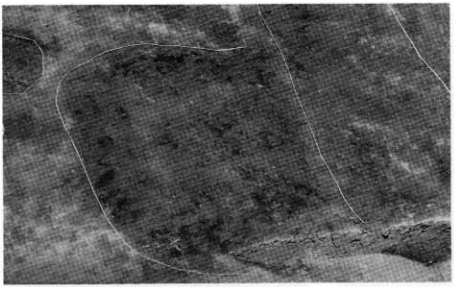


ＳＫ-20完掘状況（南より）

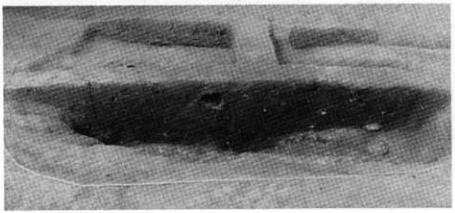


ＳＫ-23完掘状況（東より）

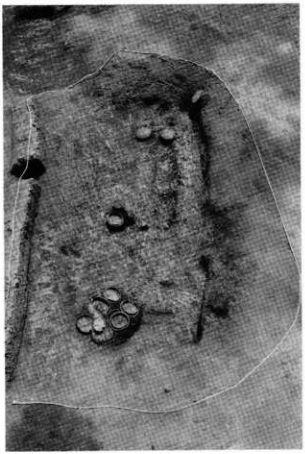
図版 4



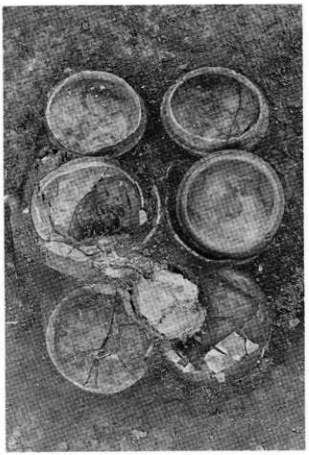
ＳＫ-02検出状況
（東より）



ＳＫ-02断面
（南より）

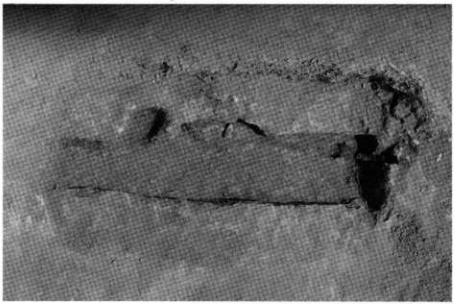


ＳＫ-02遺物検出状況（西より）

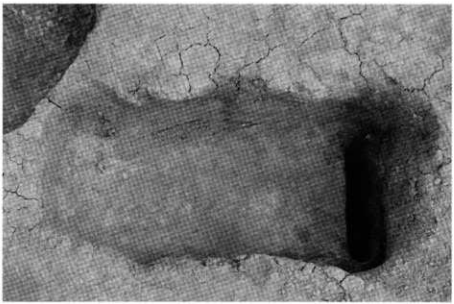


（同左）拡大（北西より）

ＳＫ-11検出状況
（南より）



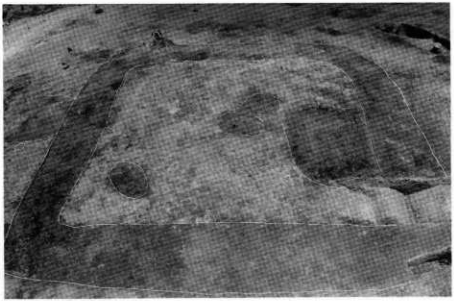
ＳＫ-11完掘状況
（南より）



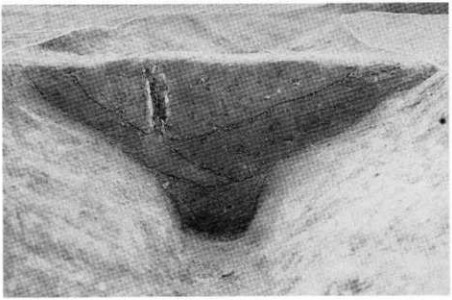
ＳＫ-15完掘状況
（南より）

図版 6

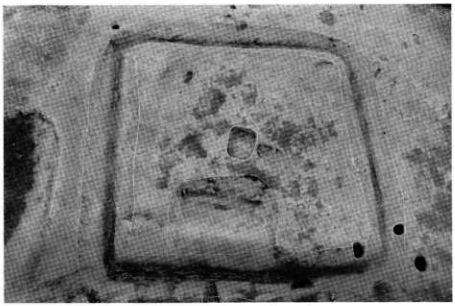
方形周溝調査風景
（東より）



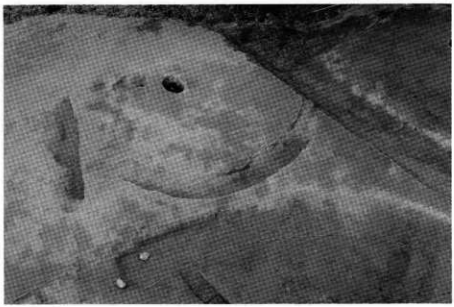
方形周溝検出状況
（東より）



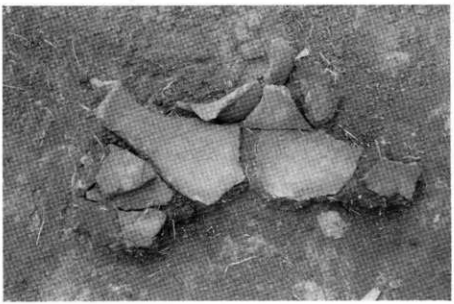
方形周溝断面
（東より）



方形周溝完掘状況
（北より）



円形周溝完掘状況
（南東より）



円形周溝土器出土状況
（東より）

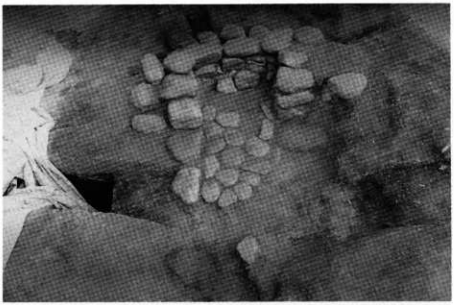
図版 8

17・18号墳測量風景
（南より）

17号墳墳丘検出状況
（北西より）

17号墳墳丘断ち割り
（東より）

18号墳墳丘検出状況
（西より）

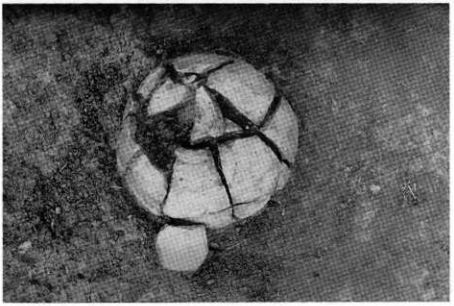


18号墳石室
（西より）

18号墳石室
（東より）

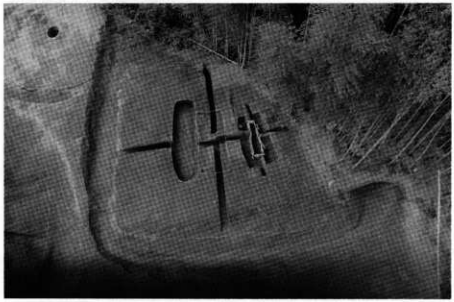
図版10

18号墳聰出土状況
（東より）

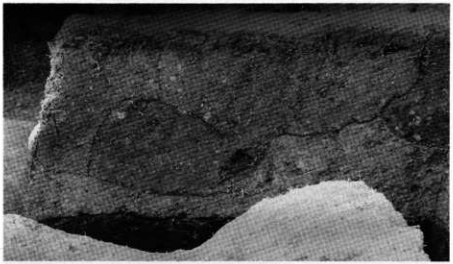


18号墳高坏出土状況
（南より）

18号墳把手付椀出土状況
（南より）



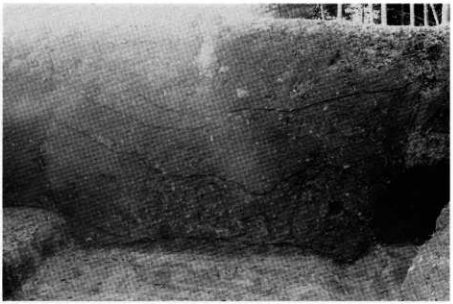
19号墳完掘状況
（東より）



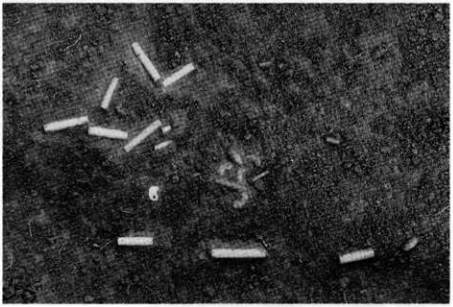
19号墳第１主体部断面
（東より）

19号墳第１主体部完掘状況
（東より）

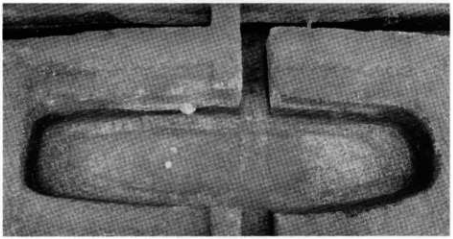
図版12



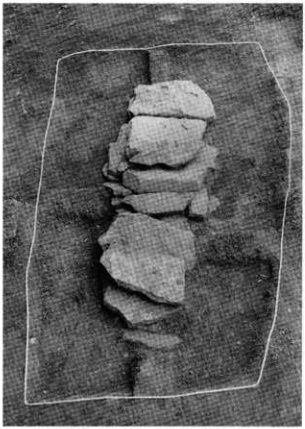
19号墳第２主体部断面
（東より）



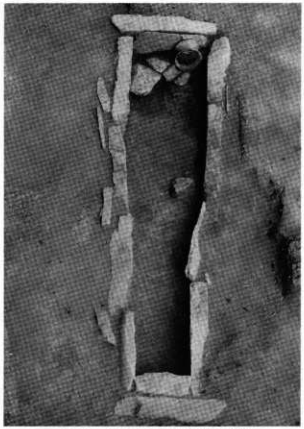
19号墳
第２主体部玉類出土状況
（西より）



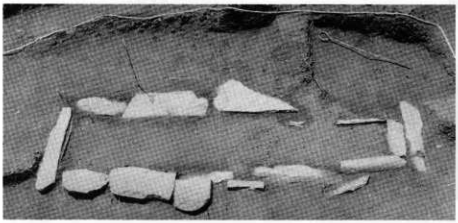
19号墳第２主体部完掘状況
（南より）



19号墳第３主体部検出状況（西より）



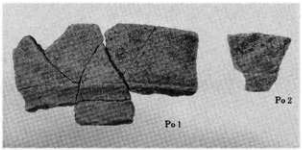
19号墳第３主体部完掘状況（西より）



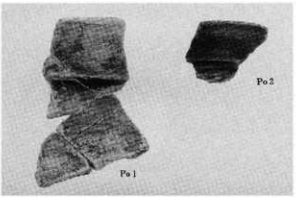
19号墳
第３主体部蓋石除去状況
（北より）

19号墳
第３主体部土器出土状況
（西より）

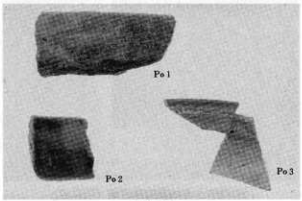
図版14



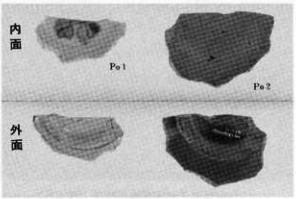
S I -01



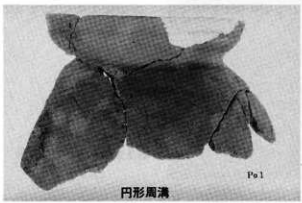
S I -03



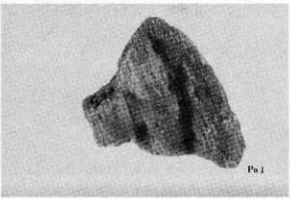
S K -09

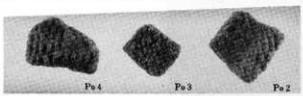


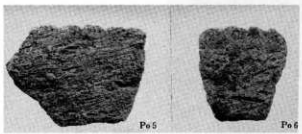
S K -61



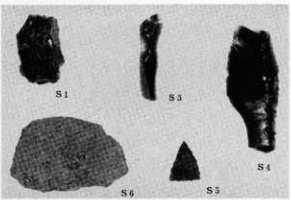
円形周溝



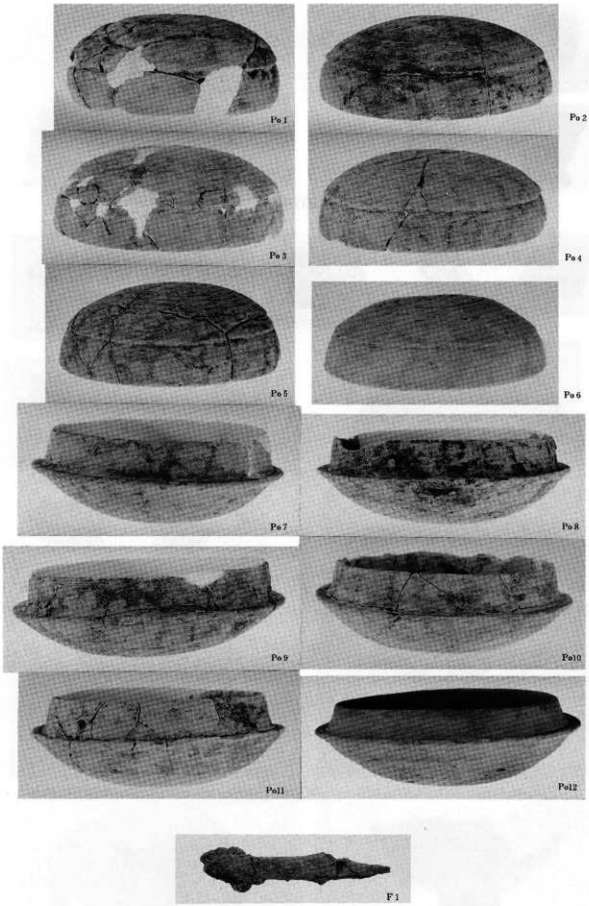




縄文土器

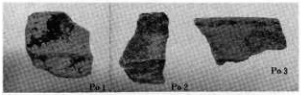


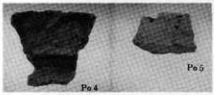
石器

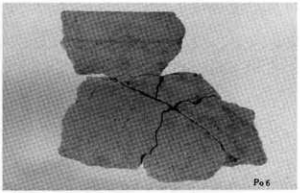


SK—02　土器・鉄器

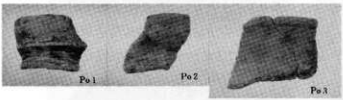
図版16

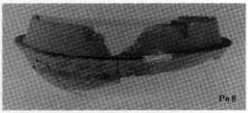


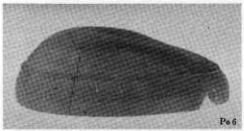


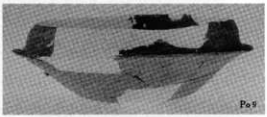


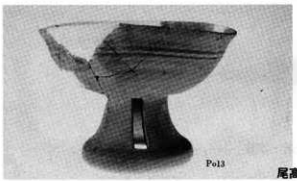
尾高17号墳

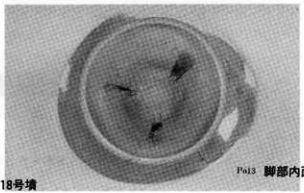






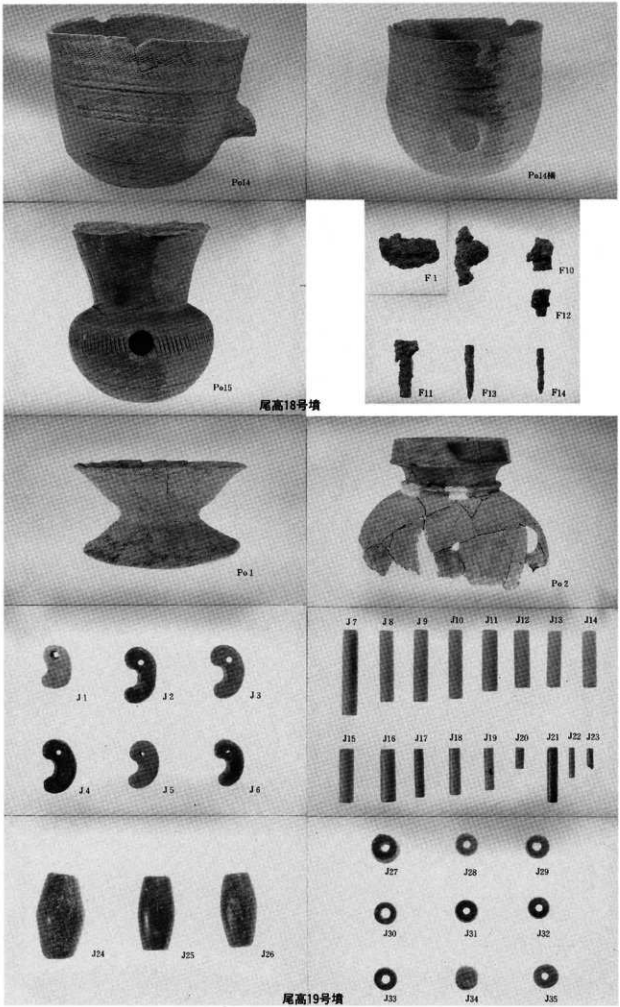






脚部内面

尾高18号墳


Pe14
Pe14補
Pe15
F1
F10
F12
F11
F13
F14
尾高18号墳
Pe1
Pe2
J1
J2
J3
J4
J5
J6
J7
J8
J9
J10
J11
J12
J13
J14
J15
J16
J17
J18
J19
J20
J21
J22
J23
J24
J25
J26
J27
J28
J29
J30
J31
J32
J33
J34
J35
尾高19号墳

1993年度調査

（尾高御建山遺跡３区）

例　　言

1．本報告は、米子市尾高に所在する尾高御建山遺跡（３区）の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2．発掘調査は、建設省倉吉工事事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団西部埋蔵文化財調査事務所が1993年度に行った。
3．本報告の執筆・編集は仲田が行った。
4．下記の方々には、調査にあたりご指導・ご教示頂いた。

井上　貴央（鳥取大学医学部教授）　　中原　斉　（淀江町教育委員会）
山田　治　（京都産業大学理学部教授）　　竹中　孝浩（倉吉市教育委員会）
古野　毅　（島根大学農学部助教授）　　米子市教育委員会　　水曜考古倶楽部

5．ＳＫ－77出土炭化木の^{14}Ｃ年代測定は、山田治先生にお願いした。

凡　　例

1．本報告における方位は、真北を示す。
2．調査区に設定した10m×10mグリッドは、前年度の継続・延長である。グリッド名は北西隅交点の杭名をもって呼称した。
3．遺構記号・遺物記号は次のように表す。

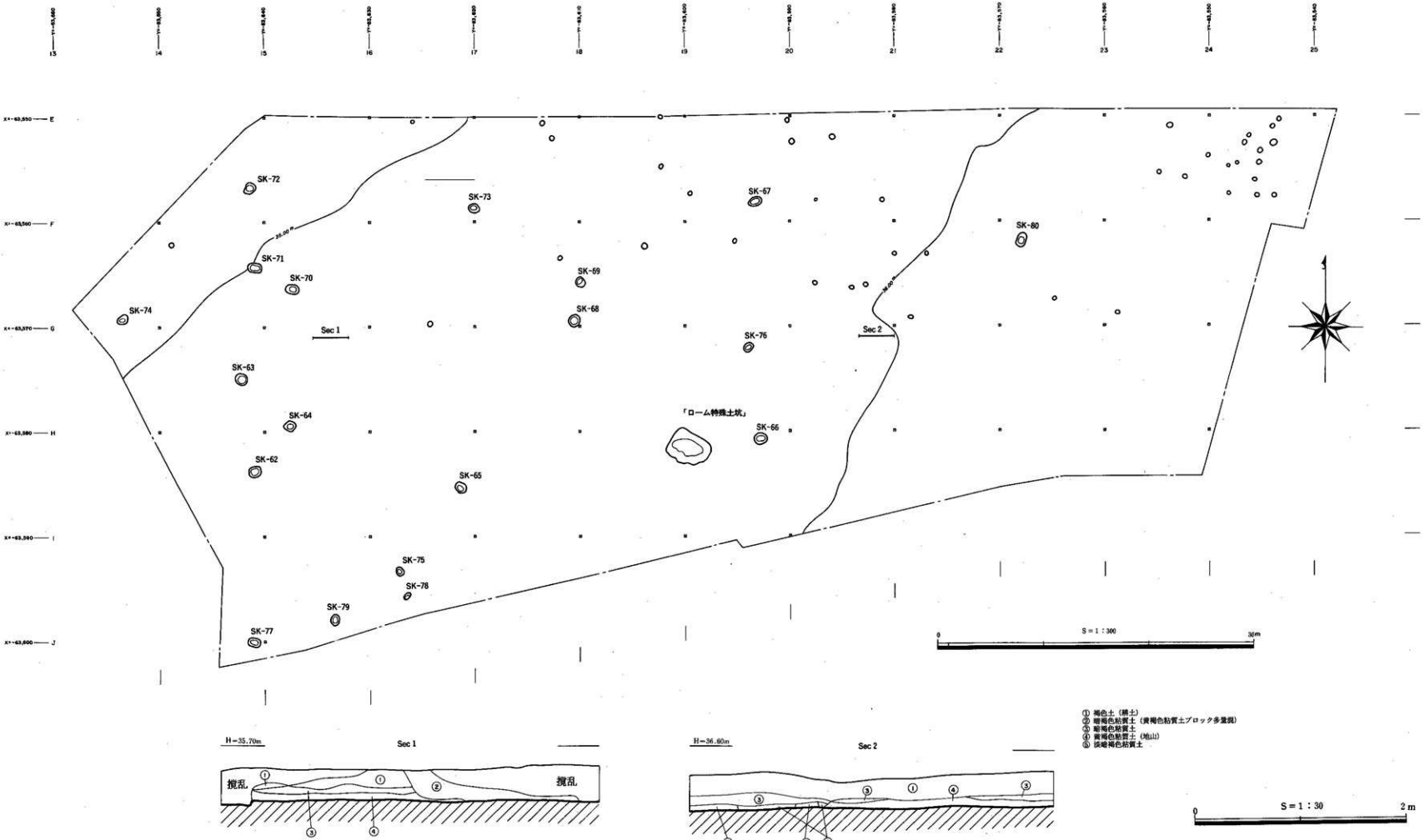
ＳＫ：土坑　　Po：土器

4．遺構挿図中におけるセクション・エレベーションの基準線標高は「Ｈ＝」の記号で表記する。
5．落し穴の遺構図においては、石の輪郭線を青色、杭の固定土（黄茶褐色粘質土の固定材）の輪郭線を赤色で表記する。
6．遺構図中の破線で表現した輪郭線は推定線である。
7．遺構番号（ＳＫ）は、前年度に引き続き62番から付けた。
8．（　）内の数値は推定値、［　］の数値は残存値を表す。

目　　次

例言
凡例
目次
第１章　調査の経緯
　第１節　発掘調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……1
第２章　遺　　構……4
　１．落し穴　　２．その他の遺構
第３章　出土遺物……24
第４章　小　　結　～尾高御建山遺跡の落し穴～……27
付　論　　尾高御建山遺跡３区の液体シンチレーション^{14}Ｃ年代測定結果……32

京都産業大学　理学部　山田　治



挿図1　3区遺構配置図　土層断面図1・2

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯

今回の調査地である３区は、前年度（1992年度）の調査地（１・２区）の隣接地である。前年度の調査地の遺構の在り方から、当地区にも遺構が広がることが確実視されたため、建設省倉吉工事事務所と鳥取県教育委員会が協議し、引き続き今年度本調査の運びとなった。財団法人鳥取県教育文化財団が倉吉工事事務所の委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が調査を実施した。

第２節　調査の経過と方法

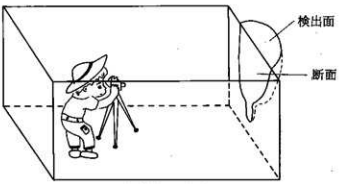
今年度の調査対象面積は、4,400㎡である。平成５年４月より発掘調査に着手した。

前年度の調査によって、現地表下約30㎝まで撹乱されており、その撹乱層の直下が遺構面であることを確認していた。それをふまえて、調査地中央に東西にわたるベルトを設定した上で、重機による表土剥ぎを行い、撹乱層を除去した。その後、人力による精査を行い、黒褐色系の粘質土の落ち込みを遺構としてとらえた。また、前年度の調査で設定したグリッドを延用して10m×10mのグリッドを設定した。

落し穴と思われる遺構については、その土層断面の観察に調査の主眼を置いた。基本的には、検出面で遺構の輪郭をとらえ、南側を半截した。そして下図のように南側を大幅に掘削し、断面観察を容易にした。土層断面について記録を取った後、残りの北側半分を完掘した。この際、真横からの完掘写真を撮影することに留意した。この調査方法には、①底面ピット・杭痕跡の断面形の観察が容易になる、②土層断面の観察・記録が正確にできる、③底面ピット・杭の固定土・石などの施設や杭痕跡を発見しやすく、記録も取りやすい、といった利点がある。ただ、完掘写真が完全な形で撮影できないという問題点もある。

ローム特殊土坑については一応調査したが、後述するとおり、人為的な遺構ではないと判断した。

遺構の調査後には、調査地全体の地形測量を行い、全景写真を東西２方向から撮影した。最後に遺構を埋め戻し、６月17日に発掘作業を終了した。



半截断面の観察

調　査　体　制

調査は、鳥取県教育委員会文化課・鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもと、下記の体制で実施された。

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理事長　西尾邑次（鳥取県知事）
副理事長兼常務理事　入江圭司
事務局長　若松良雄

財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター

所長　土井田憲治（鳥取県教育委員会文化課課長）
次長　山根豊己
庶務係長　山根夏男（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）
調査指導係長　田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）
主任事務職員　木下利雄
事務　嶋村八重子

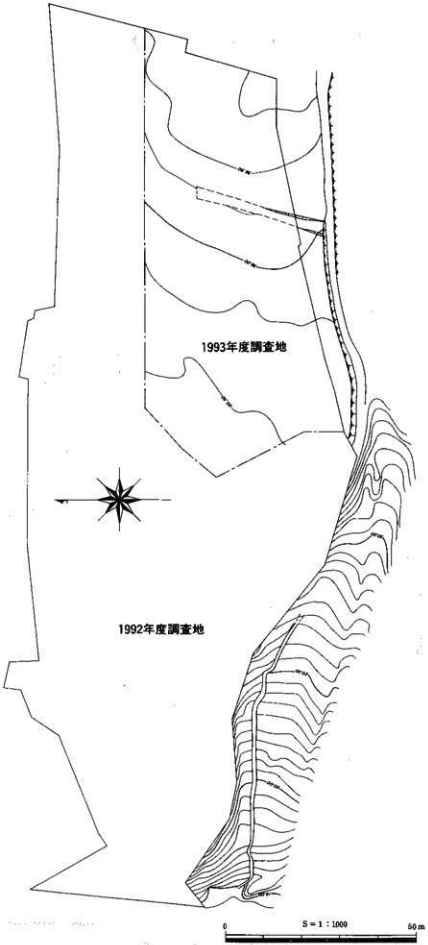
○調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財調査事務所

所長　松尾忠一
調査員　北浦弘人　原田雅弘　西川徹　山田真一
山川茂樹　仲田信一　中山寧人　志田睦
調査補助員　樋口友枝　山崎裕子
整理員　杉田千津子
整理作業員　稲垣美智恵　遠藤和子　岡田千秋　小川哲
表明美　小山菜穂子　左藤博　田中和子
塚田文子　中原千恵　二宮さおり　福田弥千代
山本清子　山本久美恵

下記の方々に発掘調査作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。

足立　薫、井澤　正治、伊藤満寿子、大塚　和子、大本　富介、奥田　道子、勝部　恵、角谷　美貴
亀山　梶子、嘉本　真弓、黒見まゆみ、小林美知子、桜田美智子、篠村　孝美、下村　清美、下村　哲夫
高田　茂、坪井　好枝、長尾　茂、中曽　麗子、中田　文子、西川　幸枝、野坂　貞子、野口　稔
一二美登里、福富美代子、船岡　幹子、船越　典子、船田　裕子、本田　美雪、松井　操、松原　園子
松原　艶子、松波　綾子、松本　良子、三浦　一枝、光岡　年春、矢信　敦子、山崎　博、山中　実
山村　節子、吉田　一子、吉田　繁（五十音順、敬称略）

調査参加者

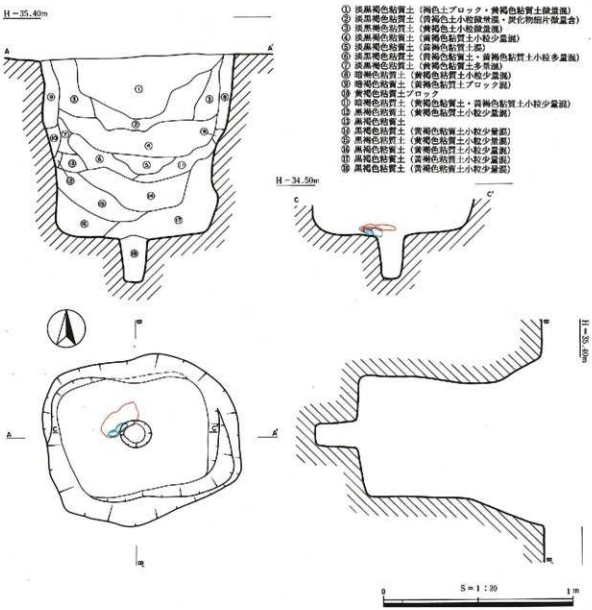


挿図２　尾高御建山遺跡調査地現況図

第2章　遺　構

1．落し穴

落し穴と考えられるものはＳＫ－62～78の17基である。長方形・隅丸長方形・円形・楕円形の平面プランを示し、１基を除き底面ほぼ中央にピット（以下、底面ピットと称する）を持つ。前年度（1992年度）の調査で検出した落し穴と同形態である。この底面ピットは、獲物を殺傷するための鋭状の杭をすえるために掘られたものと考える。底面ピット周辺で、石や杭の固定土（黄茶褐色粘質土の固定材）を検出したものがいくつかあり、底面ピットに杭を固定するための工夫が認められた。杭の固定土を詳細に観察した結果、１つの底面ピットに複数の杭が立てられたことがうかがわれた。この痕跡をここでは、杭痕跡と表現する。また、底面ピットのように、予め穴を掘り込んでおいて杭を立てるのではなく、杭を底面に直接突き刺したと思われる小穴もあり、これについても杭痕跡と称する。なお、落し穴の実測図において、石は青色、杭の固定土は赤色で表している。ＳＫ－77で炭化木が出土した以外、遺物は検出されなかった。



① 淡黒褐色粘質土（褐色土ブロック・黄褐色粘質土微量混）
② 淡黒褐色粘質土（黄褐色土小粒微無機・炭化物細片微量含）
③ 淡黒褐色粘質土（黄褐色土小粒微量混）
④ 淡黒褐色粘質土（黄褐色粘質土小粒少量混）
⑤ 淡黒褐色粘質土（黄褐色粘質土微）
⑥ 淡黒褐色粘質土（黄褐色粘質土・黄褐色粘質土小粒多量混）
⑦ 淡黒褐色粘質土（黄褐色粘質土多量混）
⑧ 暗褐色粘質土（黄褐色粘質土小粒少量混）
⑨ 暗褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロック混）
⑩ 黄褐色粘質土ブロック
⑪ 暗褐色粘質土（黄褐色粘質土・黄褐色粘質土小粒少量混）
⑫ 黒褐色粘質土（黄褐色粘質土小粒少量混）
⑬ 黒褐色粘質土
⑭ 黒褐色粘質土（黄褐色粘質土小粒少量混）
⑮ 黒褐色粘質土（黄褐色粘質土小粒少量混）
⑯ 黒褐色粘質土（黄褐色粘質土小粒少量混）
⑰ 黒褐色粘質土（黄褐色粘質土小粒少量混）
⑱ 黒褐色粘質土（黄褐色粘質土小粒少量混）

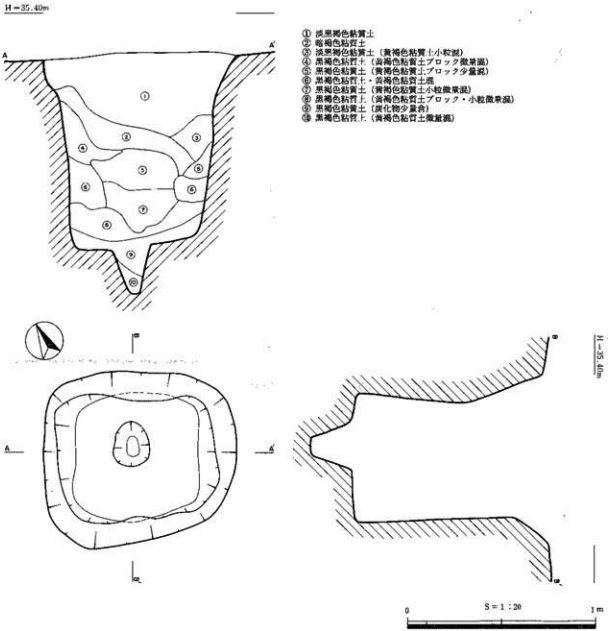
挿図３　ＳＫ－62遺構図

ＳＫ－62（挿図３　図版３・４）

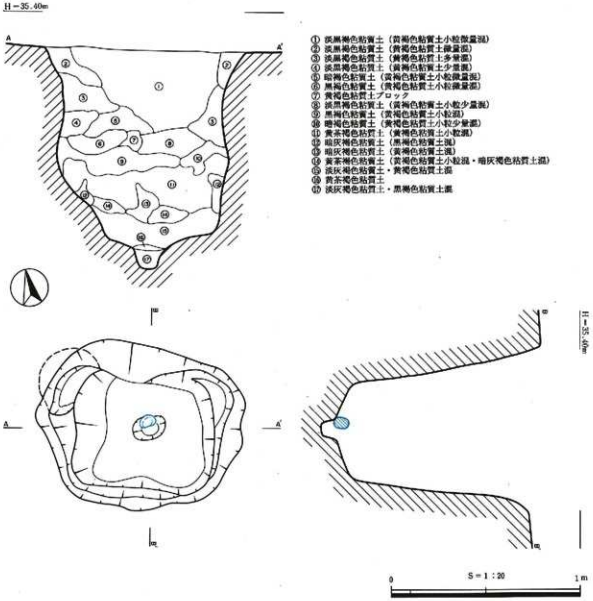
Ｈ14グリッドの東寄りに位置する。検出面は隅丸長方形、底面は長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸102cm、短軸84cm、底面で長軸77cm、短軸56cm、深さ98cmを測る。底面ピットは径16cm、深さ22cmを測る。埋土は、上層が淡い黒褐色粘質土系の土層、中層は淡い黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が混在し、下層・底面ピットは濃い黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が少量混在している。土坑底面では、底面ピットの上端部分で杭の固定土と、その固定土に覆われるようにして、７cm大の石を２個検出した。

ＳＫ－63（挿図４　図版５）

Ｇ14グリッドの東寄りに位置する。検出面は隅丸長方形、底面は長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸101cm、短軸92cm、底面で長軸69cm、短軸64cm、深さ101cmを測る。底面ピットは径24cm、深さ25cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系の土層、中層は黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が混在し、下層は黒褐色粘質土に黄褐色粘質土が少量混在している。土坑底面直上から底面ピット内に入り込んでいる⑨層には、炭化物の細片が少量含まれていた。



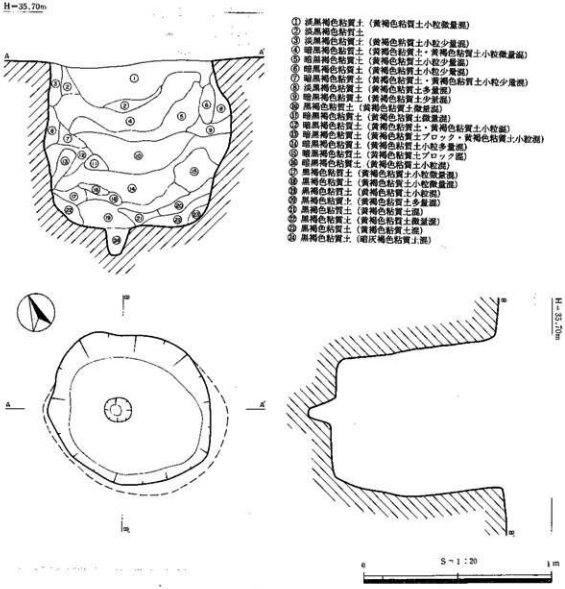
挿図４　ＳＫ－63遺構図



挿図5　ＳＫ－64遺構図

ＳＫ－64（挿図５　図版６）

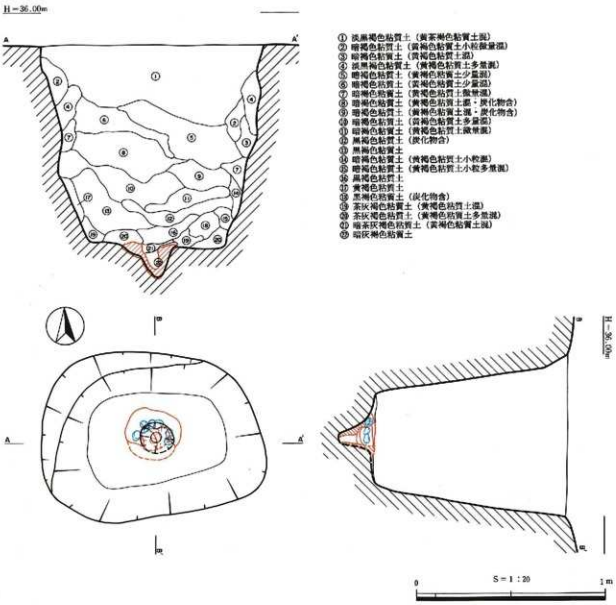
Ｇ15グリッドの南西寄りに位置する。検出面は隅丸長方形、底面は長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸108cm、短軸86cm、底面で長軸51cm、短軸49cm、深さ105cmを測る。底面ピットは径18cm、深さ12cmを測る。埋土は、上層は黄褐色粘質土が少量混在する淡い黒褐色粘質土である。中層は黄茶褐色粘質土が大半をしめるが、これは壁面からの崩落と考える。下層の⑮層は地山に類似する土質であるが、壁面からの崩落とは考えがたい。あるいは人為的な埋積の可能性もある。底面ピット直上の⑯層は杭の固定土の可能性もある。底面ピット上端部で、石を１個検出した。



挿図6　ＳＫ－65遺構図

ＳＫ－65（挿図6　図版7）

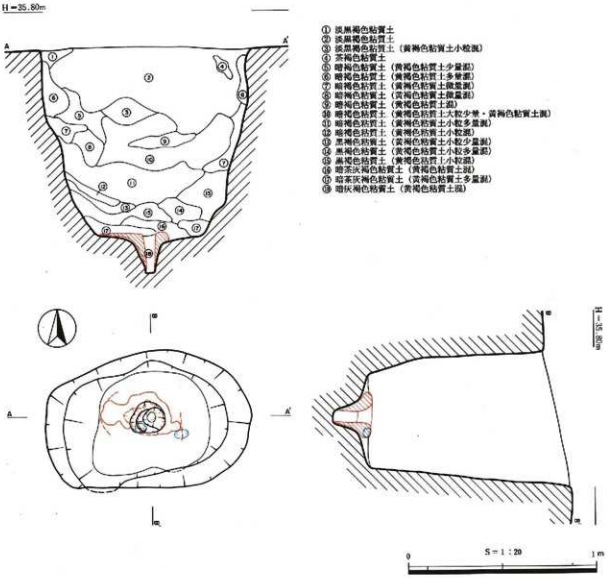
H16グリッドの東寄りに位置する。検出面・底面ともに楕円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸89cm、短軸80cm、底面で長軸74cm、短軸61cm、深さ89cmを測る。底面ピットは径14cm、深さ15cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系の土層である。中・下層は黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が少量混在している。⑮・⑳層は黄褐色粘質土を多量に含んでいるが⑧・⑨層辺りの壁面が崩れた土と思われる。



挿図７　ＳＫ－66遺構図

ＳＫ－66（挿図７　図版８）

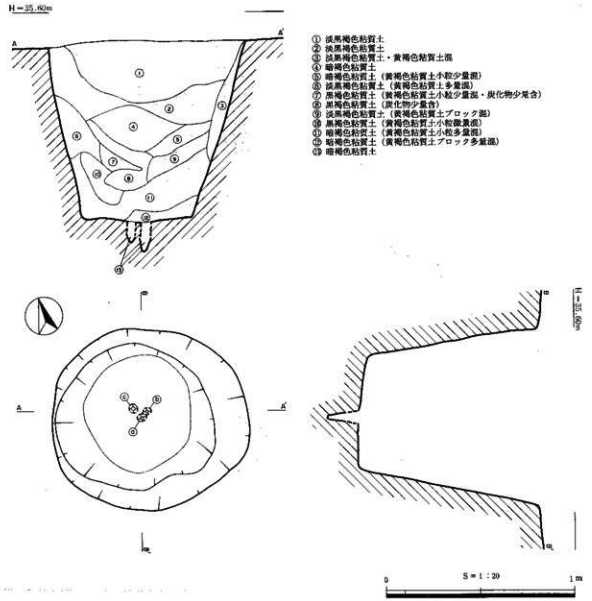
Ｈ19グリッドの北東寄りに位置する。検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸116cm、短軸87cm、底面で長軸74cm、短軸48cm、深さ105cmを測る。底面ピットは径18cm、深さ18cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系で、中層は黒褐色粘質土系の土層である。下層・底面ピットは灰褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が混在している。土坑底面では、底面ピットを囲むようにして杭の固定土があり、杭の固定土の中に、５cm大の石が７個、底面ピットを囲むように並んでいた。底面ピット内には杭の固定土が入り込み、杭痕跡（㉑・㉒層　径11cm、深さ18cm）が確認できた。



挿図８　ＳＫ－67遺構図

ＳＫ－67（挿図８　図版９）

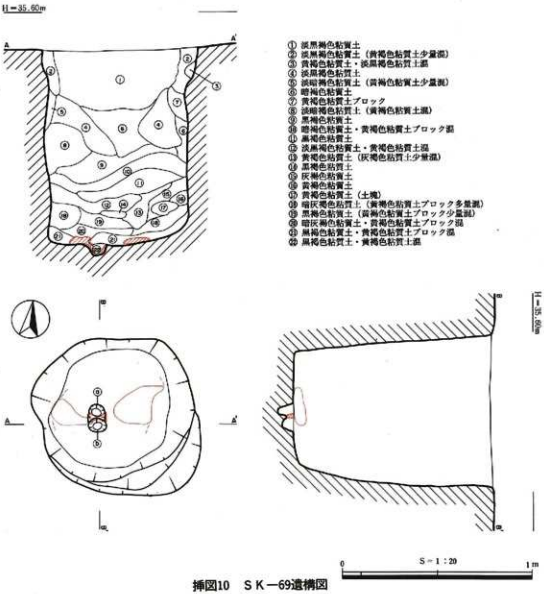
Ｅ19グリッドの南東寄りに位置する。検出面・底面ともに楕円形、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸108cm、短軸73cm、底面で長軸58cm、短軸51cm、深さ103cmを測る。底面ピットは径19cm、深さ17cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系で、中・下層は黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土の粒が混在している。土坑底面では、杭の固定土と、７cm大の石２個を検出した。杭の固定土が底面ピット内に入り込み、杭痕跡(⑱層　径５cm、深さ20cm）が確認できた。



挿図9　ＳＫ－68遺構図

ＳＫ－68（挿図9　図版10）

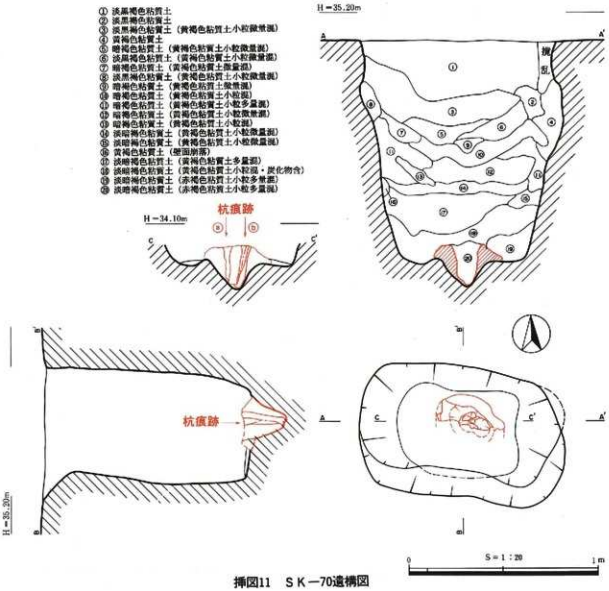
Ｆ17グリッドの南東寄りに位置する。検出面は楕円形、底面は円形を呈し、底面ピットはなく、底面に直接穿たれた杭痕跡を３つ持つ。規模は、検出面で長軸106cm、短軸98cm、底面で長軸63cm、短軸62cm、深さ95cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系の土層で、中層は黒褐色粘質土系の土層である。中層両端部・下層は淡い黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土の粒が混在している。杭痕跡ⓐは径［５］cm、深さ17cm、ⓑは径［４］cm、深さ16cm、ⓒは径［５］cm、深さ12cmを測る。杭痕跡の埋土は暗褐色粘質土(⑬層)である。



挿図10　ＳＫ－69遺構図

ＳＫ－69（挿図10　図版10・11）

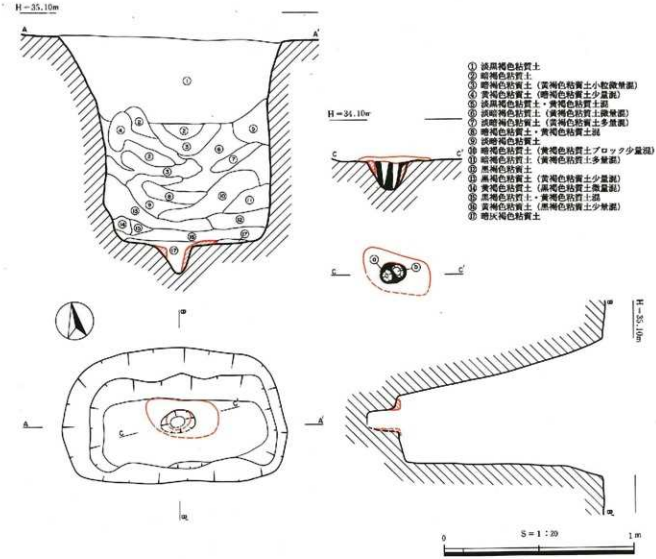
Ｆ17グリッドの東寄りに位置する。検出面・底面ともに円形を呈し、底面ピットを２つ持つ。規模は、検出面で長軸95cm、短軸88cm、底面で長軸69cm、短軸63cm、深さ105cmを測る。底面ピットⓐは径８cm、深さ８cm、ⓑは径10cm、深さ６cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系の土層である。中・下層は黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土ブロック・粒が混在している。土坑底面で、杭の固定土を検出した。また底面ピット内にも杭の固定土が入り込み、杭痕跡(㉒層)が確認できた。杭痕跡ⓐは径５cm、深さ８cmで、ⓑは径７cm、深さ６cmを測る。



挿図11　ＳＫ－70遺構図

ＳＫ－70（挿図11　図版12）

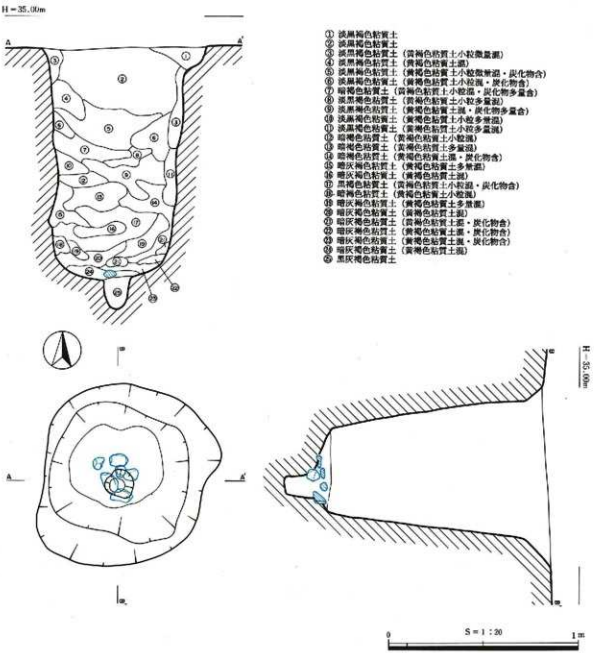
Ｆ15グリッドの南西寄りに位置する。検出面は隅丸長方形、底面は長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸109cm、短軸69cm、底面で長軸63cm、短軸51cm、深さ111cmを測る。底面ピットは径24cm、深さ14cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系である。中・下層は淡い黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土粒が混在している。底面ピットは淡い黒褐色粘質土系の土層に赤褐色粘質土粒が混在している。土坑底面では、杭の固定土が底面ピットの壁面から底面にかけて余すところなく覆う状態で入り込み、２つの杭痕跡(⑳層)を明瞭に確認できた。杭痕跡ⓐは径５cm、深さ18cm、ⓑは径６cm、深さ21cmを測る。



挿図12　ＳＫ－71遺構図

ＳＫ－71（挿図12　図版11）

Ｆ14グリッドの東寄りに位置する。検出面は隅丸長方形、底面は長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸117cm、短軸72cm、底面で長軸85cm、短軸32cm、深さ111cmを測る。底面ピットは径19cm、深さ14cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系の土層である。中層は淡い黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が混在している。下層は黄褐色粘質土に黒褐色粘質土が混在している。底面ピットは暗灰褐色粘質土である。土坑底面で、底面ピットを囲むようにして、杭の固定土を検出し、底面ピットの中には杭痕跡（⑰層　径14cm、深さ15cm）を検出した。杭痕跡の埋土（挿図中では黒ベタ部分）は暗灰褐色粘質土１層であるが、極めてもろい土質の部分を２ケ所【ⓐ径６cm、深さ13cm、ⓑ径７cm、深さ13cm】を明瞭に識別できた。杭が複数本であったことの痕跡と思われる。



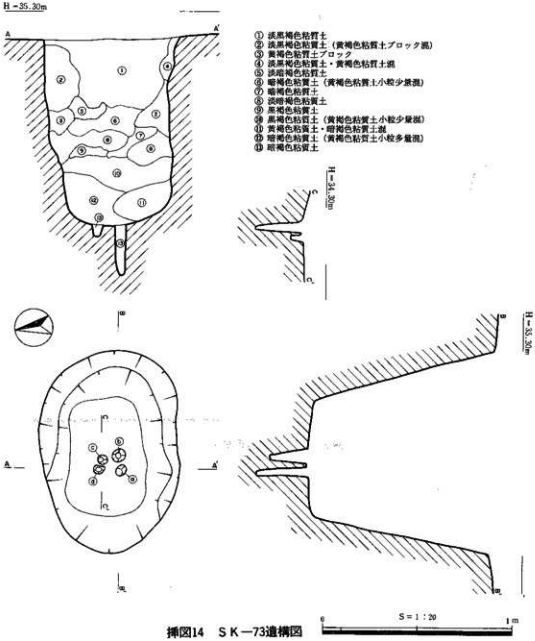
挿図13　ＳＫ－72遺構図

ＳＫ－72（挿図13　図版13）

Ｅ14グリッドの南東寄りに位置する。検出面・底面ともに隅丸長方形、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸88cm、短軸84cm、底面で長軸50cm、短軸42cm、深さ123cmを測る。底面ピットは径15cm、深さ17cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系の土層である。中層は淡い黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が混在している。下層・底面ピットは灰褐色粘質土系の土層である。底面ピット周辺で土坑底面から少し浮いた位置に５～10cm大の石を６個検出した。

ＳＫ－73（挿図14　図版14）

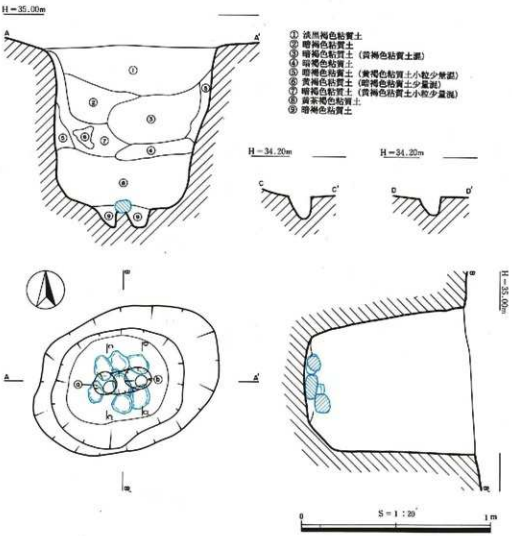
Ｅ16グリッドの南東寄りに位置する。検出面は楕円形、底面は長方形を呈し、底面ピットはなく、底面に直接穿たれた杭痕跡（⑬層）を４つ持つ。規模は、検出面で長軸102cm、短軸72cm、底面で長軸53cm、短軸45cm、深さ100cmを測る。杭痕跡ⓐは径５cm、深さ28cm、ⓑは径８cm、深さ20cm、ⓒは径６cm、深さ25cm、ⓓは径６cm、深さ６cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系の土層である。中層は黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土粒が少量混在している。下層は淡い黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が多量に混在している。



挿図14　ＳＫ－73遺構図

ＳＫ－74（挿図15　図版14）

Ｆ13グリッドの南寄りに位置する。検出面・底面ともに楕円形を呈し、底面ピットを２つ持つ。規模は、検出面で長軸105cm、短軸75cm、底面で長軸55cm、短軸45cm、深さ85cmを測る。底面ピットⓐは径12cm、深さ11cm、ⓑは径14cm、深さ９cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土で、中層は淡い黒褐色粘質土に黄褐色粘質土が混在している。下層（⑧層）は黄茶褐色粘質土である。底面ピットは暗褐色粘質土である。土坑底面で、２つの底面ピットをそれぞれ囲むように10cm大の石を７個検出した。



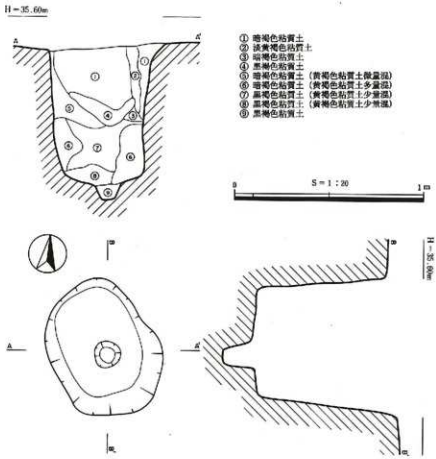
挿図15　ＳＫ－74遺構図

ＳＫ－75（挿図16　図版17）

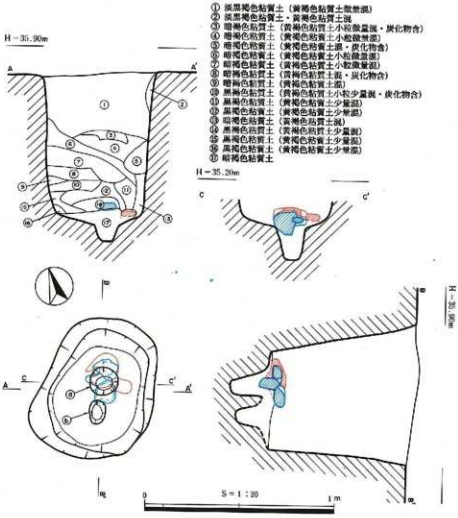
Ｉ16グリッドの西寄りに位置する。検出面は隅丸長方形、底面は長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸73cm、短軸54cm、底面で長軸57cm、短軸40cm、深さ74cmを測る。底面ピットは径14cm、深さ16cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系である。中・下層は黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が混在している。底面ピットは黒褐色粘質土である。

ＳＫ－76（挿図17　図版15）

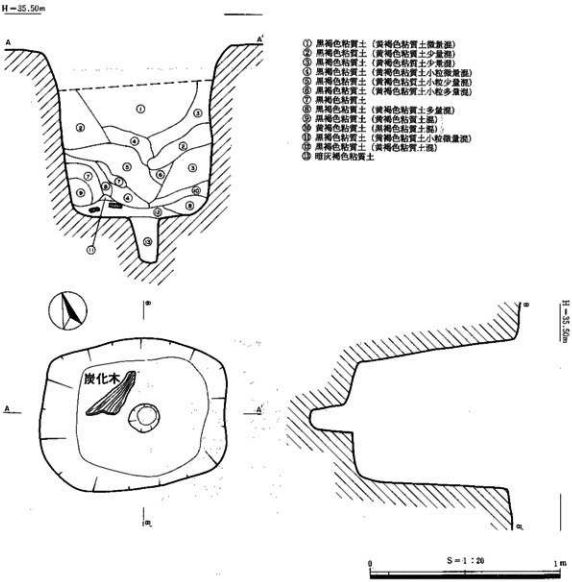
Ｇ19グリッドの北寄りに位置する。検出面・底面ともに楕円形を呈し、底面ピットを２つ持つ。規模は、検出面で長軸78cm、短軸57cm、底面で長軸62cm、短軸40cm、深さ83cmを測る。底面ピットⓐは径15cm、深さ18cm、ⓑは径13cm、深さ(14)cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系である。中・下層は黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が少量混在している。底面ピットは暗褐色粘質土である。土坑底面で、底面ピットⓐを覆うように12～13cm大の石３個と杭の固定土を検出した。



挿図16　ＳＫ―75遺構図



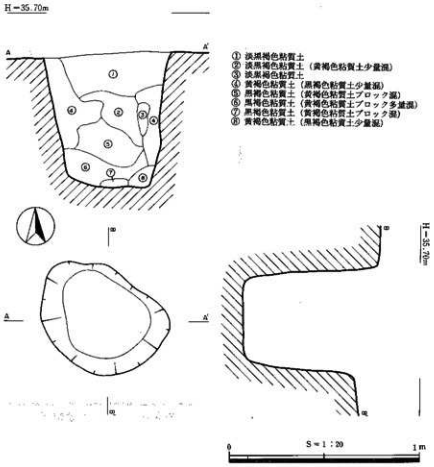
挿図17　ＳＫ―76遺構図



挿図18　ＳＫ－77遺構図

ＳＫ－77（挿図18　図版16）

Ｊ14グリッドの北東寄りに位置する。検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面で長軸96cm、短軸79cm、底面で長軸68cm、短軸61cm、深さ90cmを測る。底面ピットは径16cm、深さ25cmを測る。埋土は、上層～下層にかけて、黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が混在している。底面ピットは暗灰褐色粘質土である。⑬層中より炭化木（長軸25cm、短軸15cm、厚さ２cm）が出土した。（付論『尾高御建山遺跡３区の液体シンチレーション^{14}Ｃ年代測定結果』参照）



挿図19　ＳＫ－78遺構図

ＳＫ－78（挿図19　図版17）

Ｉ16グリッドの南西寄りに位置する。検出面・底面ともに楕円形で、底面ピットは検出されなかった。規模は、検出面で長軸80cm、短軸52cm、底面で長軸50cm、短軸41cm、深さ71cmを測る。埋土は、上層は淡い黒褐色粘質土系である。中・下層は黒褐色粘質土系の土層に黄褐色粘質土が混在している。形態・埋土から落し穴と考える。

2．その他の遺構

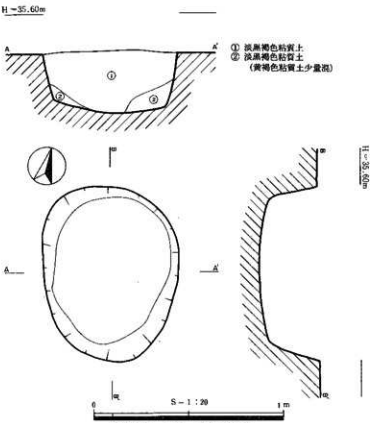
その他の遺構として、土坑２基とピット41基を検出した。

ＳＫ－79（挿図20）

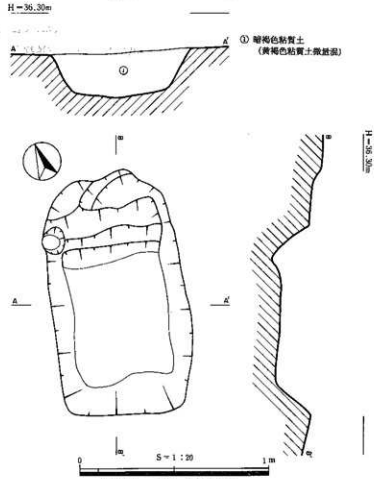
Ｉ15グリッドの南東寄りに位置する。検出面・底面ともに楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸95cm、短軸71cm、底面で長軸80cm、短軸61cm、深さ32cmを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－80（挿図21）

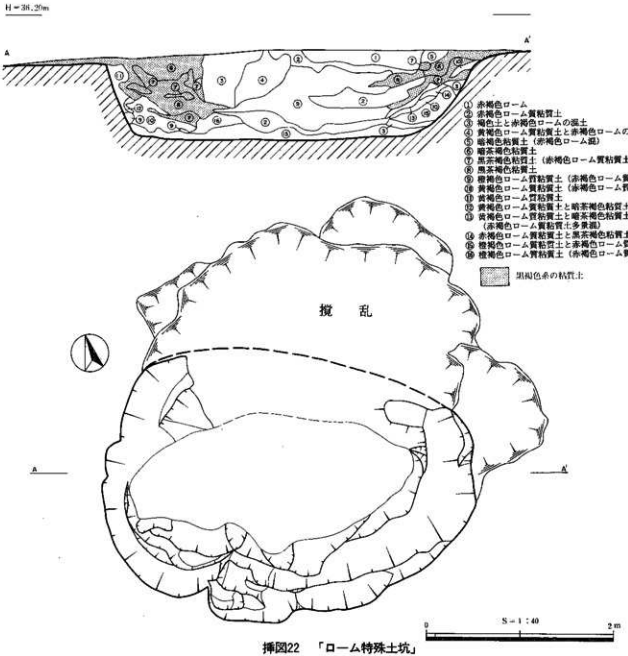
Ｆ22グリッドの北西寄りに位置する。検出面・底面ともに長方形を呈する。規模は、検出面で長軸127cm、短軸72cm、底面で長軸63cm、短軸50cm、深さ24cmを測る。遺物は出土しなかった。



挿図20　ＳＫ－79遺構図



挿図21　ＳＫ－80遺構図



挿図22　「ローム特殊土坑」

「ローム特殊土坑」について（挿図22　図版17）

いわゆる「ローム特殊土坑」と呼ばれる遺構に類似するものが、調査地内から５ケ所検出された。ここでとりあげるのは、H19グリッドの東寄りに位置するものである。北側を大幅に撹乱されているが、検出面、底面ともに不整な楕円形を呈するものと推定される。規模は、検出面で長軸396cm、短軸（288）cm、底面で長軸302cm、短軸（150）cm、深さ97cmを測る。遺物は出土していない。検出面では、暗茶褐色粘質土（⑥層）が馬蹄形に広がり、その内側に地山土に近い土質の赤褐色ローム（①層）や両者の混土（③層）が観察された。土層断面では、西側端と東側端にそれぞれ上方から斜めに落ち込む茶褐色系統の粘質土層（⑥～⑧層）が観察された。これらを核として、そこから水平方向に伸びる断面形の細長い層（赤褐色ローム質粘質土層・②層）がみられたが、①層と同様に地山土に近い土質の層である。①層と②層は、むしろ地山土の範疇として捉えられ、⑨層と⑮層（橙褐色ローム質粘質土系の混土層）が②層の間層として入り込んでいる状況といえる。このような土層断面のあり方は、末根（⑨層、⑮層）の伸びた木根の主幹部（⑥～⑧層）が腐触した状況を示すものと考える。「ローム特殊土坑」といえば、「風倒木」説など諸説あるものの、従来性格不詳の遺構として取り扱われてきた。本例については、以上の所見から非人為的に生じたものと判断した。

＊一覧表中の類型については、下記の事項を①－②－③の順序で表しています。（第４章の小結参照）

①土坑底面の掘り込み状況

A～底面ピット（杭をすえるための掘り込み）を持つもの

B～底面に直接穿たれた杭痕跡を持つもの

C～底面ピット、杭痕跡を持たないもの

②固定土（杭の固定材）の有無

1～有　0～無

③石（杭の固定材）の有無

1～有　0～無

（規模単位　cm）

SK番号	平面形 検出面	平面形 底面	規模（長軸×短軸－深さ） 検出面	規模（長軸×短軸－深さ） 底面	規模（最大径－深さ） 底面ピット	規模（最大径－深さ） 杭痕跡	長軸方位	間仕切土	石の個数	類型	備考
1	隅丸長方	隅丸長方	128×100－107	51×47	19－33	無	N-76°-E	無	0	A-0-0	
5	隅丸長方	方	80× 70－ 95	49×44	無	無	N-19°-E	無	0	C-0-0	
6	楕円	楕円	97× 83－ 85	72×56	17－19	無	N-57°-E	無	1	A-0-1	
7	楕円	楕円	74× 61－ 79	70×43	13－21	無	N-88°-W	無	0	A-0-0	
14	楕円	楕円	133×117－ 72	72×62	14－ 9	無	N-67°-E	無	1	A-0-1	
18	隅丸長方	隅丸長方	93× 63－ 70	69×45	16－16	無	N-78°-W	無	0	A-0-0	
19	隅丸長方	隅丸長方	94× 89－112	51×35	15－25	無	N-75°-E	無	2	A-0-1	
20	隅丸長方	長方	126× 81－ 85	88×48	21－25	無	N-62°-E	無	0	A-0-0	
21	隅丸長方	隅丸長方	89× 79－101	58×52	14－11	無	N-47°-E	有	0	A-1-0	
22	隅丸長方	隅丸長方	91× 78－103	47×44	18－13	無	N-54°-W	無	0	A-0-0	
23	隅丸長方	隅丸長方	100× 80－ 89	68×62	14－17	無	N-46°-W	無	0	A-0-0	
24	隅丸長方	隅丸長方	[122× 77－ 36]	114×74	30－21	無	N-55°-E	無	0	A-0-0	
27	隅丸長方	隅丸長方	[115× 64－ 22]	98×59	26－22	無	N-34°-E	無	0	A-0-0	
32	隅丸長方	隅丸長方	99× 66－ 90	60×32	14－17	無	N-2°-E	無	0	A-0-0	
36	隅丸長方	隅丸長方	112× 89－ 97	59×30	20－ 9	無	N-65°-E	無	0	A-0-0	
37	楕円	円	93× 80－ 85	50×47	無	8－12 8－12	N-89°-E	無	1	B-1-1	
38	楕円	楕円	100× 76－ 92	(47)×42	17－15	無	N-58°-E	無	5	A-0-1	最下層が固定土？（地山土？）
39	隅丸長方	隅丸長方	80× 59－113	45×28	19－ 7	無	N-55°-E	無	1	A-0-1	炭化木 B.P.3420±15 B.P.3430±15
40	隅丸長方	隅丸長方	92× 90－ 97	66×64	19－23	11－41	N-6°-W	無	0	A-0-0	
41	隅丸長方	隅丸長方	97× 80－100	66×61	14－29	無	N-57°-W	無	0	A-0-0	
42	隅丸長方	隅丸長方	94× 64－107	61×47	無	7－6	N-38°-E	無	0	B-0-0	
43	楕円	楕円	109× 93－ 83	52×41	14－24	無	N-56°-E	無	3	A-0-1	
44	隅丸長方	隅丸長方	100× 92－104	67×58	27－12	無	N-1°-W	無	0	A-0-0	
46	隅丸長方	隅丸長方	83× 61－111	63×37	13－23	無	N-42°-W	無	1	A-0-1	
47	隅丸長方	隅丸長方	135×124－110	70×68	20－13	無	N-6°-E	無	2	A-0-1	最下層が固定土？（地山土？）
48	楕円	楕円	111× 63－ 87	70×50	16－11	無	N-40°-W	無	0	A-0-0	
50	隅丸長方	隅丸長方	109× 83－ 99	90×63	15－22	無	N-54°-E	無	0	A-0-0	
51	隅丸長方	隅丸長方	111× 74－114	60×49	17－25	無	N-57°-W	無	0	A-0-0	
52	隅丸長方	隅丸長方	[124× 66－ 61]	109×60	22－34	12－24	N-61°-E	無	0	A-0-0	
53	隅丸長方	隅丸長方	102× 95－104	71×54	16－16	無	N-60°-E	無	4	A-0-1	
55	楕円	楕円	114×102－102	64×56	16－12	無	N-28°-W	無	1	A-0-1	
57	楕円	楕円	[67× 52－ 15]	51×41	18－19	無	N-78°-W	無	0	A-0-0	
58	隅丸長方	隅丸長方	164×126－ 79	117×73	22－46	無	N-61°-E	無	1	A-0-1	
62	隅丸長方	長方	102× 84－ 98	77×56	16－22	無	N-72°-E	有	2	A-1-1	
63	隅丸長方	長方	101× 92－101	69×64	24－25	無	N-65°-W	無	0	A-0-0	
64	隅丸長方	長方	108× 86－105	51×49	18－12	無	N-64°-W	無	1	A-0-1	最下層が固定土？（地山土？）
65	楕円	楕円	89× 80－ 89	74×61	14－15	無	N-42°-W	無	0	A-0-0	

挿表１　落し穴一覧表（１）

SK番号	平面形 検出面	平面形 底面	規模（長軸×短軸－深さ） 検出面	規模（長軸×短軸－深さ） 底面	規模（最大径－深さ） 底面ピット	規模（最大径－深さ） 杭痕跡	長軸方位	固定土	石の個数	類型	備考
66	隅丸長方	隅丸長方	116× 87－105	74×48	18－18	11－18	N-88°-E	有	7	A-1-1	
67	楕円	楕円	108× 73－103	58×51	19－17	5－20	N-90°-E	有	2	A-1-1	
68	楕円	円	106× 98－ 95	63×62	無	ⓐ[5]－17 ⓑ[4]－16 ⓒ[5]－12	N-54°-W	無	0	B-0-0	
69	円	円	95× 88－105	69×63	ⓐ8－8 ⓑ10－6	ⓐ5－8 ⓑ7－6	N-52°-W	有	0	A-1-0	
70	隅丸長方	長方	109× 69－111	63×51	24－14	ⓐ5－18 ⓑ6－21	N-80°-W	有	0	A-1-0	
71	隅丸長方	長方	117× 72－111	85×32	19－14	14－15 [ⓐ6－13] [ⓑ7－13]	N-81°-W	有	0	A-1-0	
72	隅丸長方	隅丸長方	88× 84－123	50×42	15－17	無	N-9°-E	無	6	A-0-1	
73	楕円	長方	102× 72－100	53×45	無	ⓐ5－28 ⓑ8－20 ⓒ6－25 ⓓ6－6	N-85°-W	無	0	B-0-0	
74	楕円	楕円	105× 75－ 85	55×45	ⓐ12－11 ⓑ14－9	無	N-67°-E	無	7	A-0-1	最下層が固定土？（地山土？）
75	隅丸長方	長方	73× 54－ 74	57×40	14－16	無	N-41°-W	無	0	A-0-0	
76	楕円	楕円	78× 57－ 83	62×40	ⓐ15－18 ⓑ13－(14)	無	N-47°-E	有	3	A-1-1	
77	隅丸長方	隅丸長方	96× 79－ 90	68×61	16－25	無	N-71°-E	無	0	A-0-0	炭化木 B.P.3250±25
78	楕円	楕円	80× 52－ 71	50×41	無	無	N-48°-W	無	0	C-0-0	

（ ）数字は推定値　［ ］数字は残存値（明らかに上部が削平を受けていると思われるもの）　【 】数字についてはＳＫ-71の本文参照

挿表１　落し穴一覧表（２）

第３章　出土遺物（挿図23　図版18）

今回の調査で検出された遺物は、すべて表土中からの出土である。土師器や陶磁器の細片が主で、図示できるものは少ない。

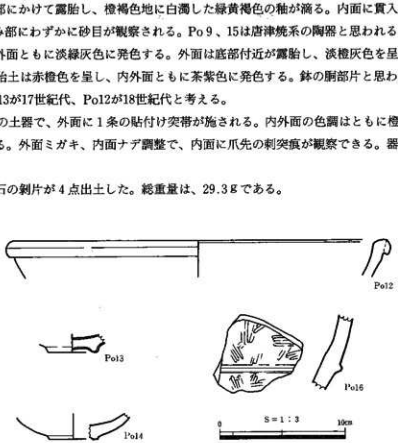
Po１～４は染付の磁器である。Po１、３、４は、胎土が乳灰色で、淡く青色気味に発色する釉がかかる。Po２は、胎土が乳白色で、無色透明の釉がかかる。いずれも紺色に紋様が染め付けられており、Po１、３の紋様は着色がにじんでいる。すべて細片であるが、Po３は皿であると思われる。いずれも16世紀、明代のものと思われる。Po５は青磁である。乳灰色の胎土に鮮やかな淡緑色の釉が施されている。碗であると思われる。

Po６、７は備前焼である。Po６は内外面とも赤紫色、Po７は内外面とも黒褐色を呈する。断面はともに淡赤紫色を呈する。Po６は擂鉢の破片、Po７は壺の肩部片と思われ、４条の沈線が認められる。ともに16世紀代のものと考えられる。Po８は壺の胴部片で、断面灰褐色、外面暗紫色、内面赤紫色を呈する。備前焼系の焼締め陶器と思われ、16世紀代のものと考える。

Po10～14は唐津焼である。Po10は、胎土は橙褐色を呈し、内外面ともに淡橙褐色に発色する。内面に貫入がみられる。皿の口縁部片である。Po11は、胎土は赤褐色を呈し、内外面ともに白濁した釉がかかる。外面下部は露胎し、赤橙色を呈する。皿の口縁部片である。Po12は、胎土は淡赤橙褐色を呈し、内外面ともに暗紫色に発色する。胎土中に砂粒多く、器壁面に浮き出ている。玉縁口縁を呈し、内面に卸目４条をわずかに観察できる擂鉢である。Po13は、胎土は灰褐色を呈し、内外面ともに淡緑灰色に発色する。内外面に貫入がみられる。碗の底部片で、畳付けに砂目が観察される。Po14は、胎土は暗橙灰色を呈し、内面は緑灰色が濃淡をもって発色する。外面は体部下半から底部にかけて露胎し、橙褐色地に白濁した緑黄褐色の釉が滴る。内面に貫入がみられる。皿の底部片で、内面見込み部にわずかに砂目が観察される。Po９、15は唐津焼系の陶器と思われる。Po９は、胎土は淡橙灰色を呈し、内外面ともに淡緑灰色に発色する。外面は底部付近が露胎し、淡橙灰色を呈する。皿の口縁部片である。Po15は、胎土は赤橙色を呈し、内外面ともに茶紫色に発色する。鉢の胴部片と思われる。Po９～11、14が17世紀前半、Po13が17世紀代、Po12が18世紀代と考える。

Po16は、素焼きの土器で、外面に１条の貼付け突帯が施される。内外面の色調はともに橙褐色を呈し、内面に丹塗りが認められる。外面ミガキ、内面ナデ調整で、内面に爪先の刺突痕が観察できる。器形、時期ともに不明である。

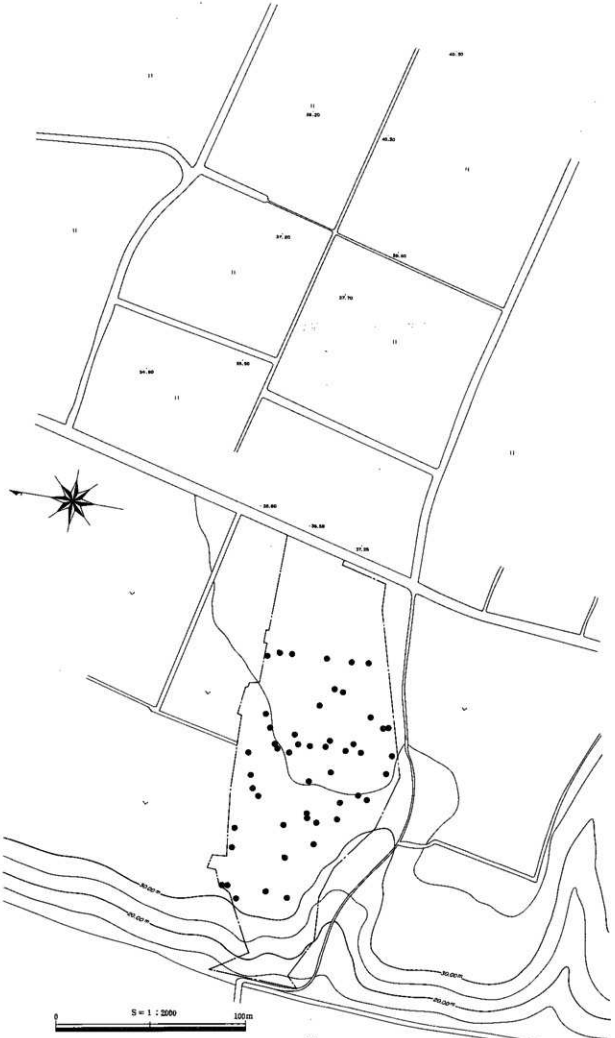
このほか、黒曜石の剥片が４点出土した。総重量は、29.3ｇである。



挿図23　出土土器実測図

遺物番号	取上番号	種　　別	器形	時　期	遺物番号	取上番号	種　別	器形	時　期
Po 1	1	染付（明）		16c代	Po 9	4	唐津焼？	皿	17c前半
Po 2	26	染付（明）		16c代	Po10	26	唐津焼	皿	17c前半
Po 3	37	染付（明）	皿	16c後半	Po11	24	唐津焼	皿	17c前半
Po 4	16	染付（中国製？）			Po12	27	唐津焼	擂鉢	18c代
Po 5	23	青磁（中国製）	碗		Po13	33	唐津焼	碗	17c代
Po 6	36	備前焼	擂鉢	16c代	Po14	12	唐津焼	皿	17c前半
Po 7	22	備前焼	壺	16c代	Po15	2	唐津焼？	鉢	
Po 8	2	備前焼？	壺	16c代	Po16	35	素焼き		

挿表 2　出土土器一覧表（挿図23　図版18）



挿図24　尾高御建山遺跡の落し穴群

第4章　小　結 ～尾高御建山遺跡の落し穴～

立地について（挿図24参照）

尾高御建山遺跡の落し穴は、1～3区を通じて14,400㎡（うち、台地上の平坦部12,800㎡）の範囲に50基が存在した。当遺跡は台地縁辺部の海抜33～36mの範囲に位置し、南側には古来、氾濫流によって刻まれてきた谷がある。西側は比高差－15mをもって、日野川水系によって形成された氾濫原が広がる。調査地は限定された範囲であるため、調査地外（特に、北側の畑地）にも落し穴の分布が広がることは予測されるところである。

規模について

落し穴の規模を平均値で表すと、検出面の長軸は101.8cm、短軸は80.9cm、底面の長軸は66.5cm、短軸は50.5cm、深さは96.1cm（明らかに上部を削平されたと思われるものは除く）である。底面ピットの平均規模は、径17.2cm、深さ18.1cmである。杭痕跡の平均規模は、径7.2cm、深さ16.8cmである。規模の上でのばらつきはあまりみられない。

形態について

平面プランは、ほぼ検出面形と底面形が同じ平面形系を示す。その組成は、長方形系（長方形・隅丸長方形）が34基、円形系（円形・楕円形）が16基である。断面形は崩落により変形したものはあるが、ほぼ直線的に立ち上がるものがほとんどである。

遺物・時期について

SK－77の最下層中から炭化木を検出した。あまりにもろく、顕微鏡観察のための切片採取ができなかったため、樹種の同定は不可能であった。ただし、島根大学の古野先生から、道管がはっきり観察できることから広葉樹材であり、年輪幅が極端に狭いので加工しやすいがもろい材質である、とのご教示を受けた。炭化木の時期については、液体シンチレーション^{14}C年代測定によって、B.P.3250±25という結果が得られた。出土層位から、この落し穴の形成時期をほぼ示すものといえよう。

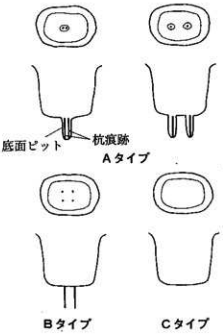
埋土について

当遺跡の埋積状況には1つの傾向がある。土層は、おおむね3段階の埋積を示し、上層は淡い黒褐色粘質土系、中層は地山土を含んだ黒褐色粘質土系、下層は地山土を少量含んだ淡い黒褐色粘質土系という構成が基本になっている。中・下層にみられる地山土（黄褐色粘質土）は土坑の上部、側面から崩落したものとも考えられるが、いくつか炭化物を含むものがみられることを合わせて考えると、カモフラージュのための蓋が陥没した可能性も考えられる。例外的な構成として、最下層に地山土と非常によく似た土質の層を検出した。SK－38・47・64・74の4基である。自然堆積とは考えがたく、杭の固定土として使用したか、一度落し穴として使用した後、再利用したか、または埋め戻して二次的な使用をした、等の可能性を推測する。

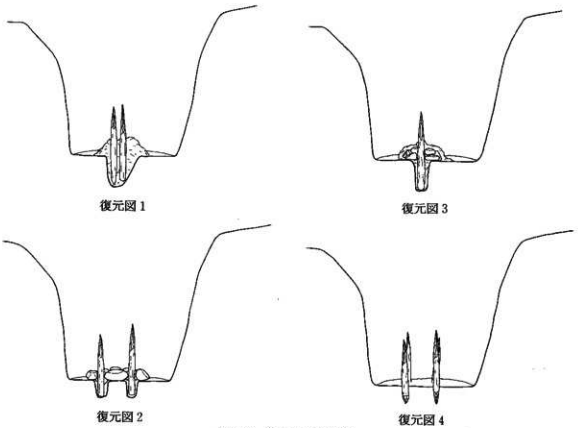
底面の施設について（挿表1参照）

①土坑底面の小穴ついて（挿図25参照）

底面ピットを持つもの－Aタイプ、底面に直接穿たれた杭痕跡を持つもの－Bタイプ、小穴を持たないもの－Cタイプの3種がみられる。Aタイプを示す落し穴は、石、固定土を使用し、杭の



挿図25　落し穴の模式図



挿図26　落し穴の復元図

固定に特に留意している様子がうかがわれる。顕著な例として、SK—66（石・固定土）、SK—70（固定土）、SK—72・74（石）が挙げられる。Bタイプを示す落し穴は、杭を直接土坑底面に突き刺したものと考える。顕著な例として、SK—73が挙げられる。両者を比較すると、Aタイプの落し穴はBタイプの場合より、土坑底面に露れた地山の土質が固いようである。Aタイプの落し穴は44基、Bタイプの落し穴は4基、Cタイプの落し穴は2基を数えた。（挿表3）

②杭の固定について（挿図26参照）

杭を据えるにあたっては、まず底面に小穴を穿つか、否かという選択を迫られる。小穴を穿たない場合は、杭を立てない落し穴か、別の方法で杭を固定するかのいずれかとなる。小穴を穿つ場合は、上記のとおりAタイプとBタイプの2つの方法がある。いずれにせよ杭が安定して立っていればよいわけであるが、杭が固定されていない場合、固定材を利用してさらに杭の安定を図るものもある。それは、杭の基部及び底面ピットの隙間に土（固定土）をつめる（復元図1）、杭の基部に石（自然礫）を巡らせる（復元図2）、石と固定土を併用する（復元図3）の3つの方法である。このことについては、以下の①—②—③の順序で表して類型化することとする。

①タイプ別（A、B、C）

②固定土の有無（1～有　0～無）

③石の有無（1～有　0～無）

（＊例：底面ピットを持ち、杭を石で固定したと思われるものA-0-1型）

	1—1	1—0	0—1	0—0	計
A	4	4	14	22	44
B	1	0	0	3	4
C	0	0	0	2	2
計	5	4	14	27	50

挿表3　落し穴の類型別数量組成表

番号	遺跡名	所在地	基数	類型				備考	文献番号
				A	B	A+B	C		
1	青木	米子市	228	185	0	0	43	C－0－1が1基	(1)
2	樋ノ口第3	米子市	9	8	0	0	1		(2)
3	樋ノ口地区	米子市	3	3	0	0	0		(3)
4	成ヶ谷西(諏訪1号墓下層)	米子市	2	2	0	0	0		(4)
5	別所1号墳下層	米子市	2	1	0	0	1		(5)
6	諏訪遺跡群中原地区	米子市	1	1	0	0	0		(3)
7	諏訪遺跡群新田地区	米子市	4	4	0	0	0		(3)
8	福市吉塚地区	米子市	2	2	0	0	0		(3)
9	東宗像	米子市	10	10	0	0	0		(6)
10	喜多原第2	米子市	2	2	0	0	0		(7)
11	上福万妻神	米子市	1	0	0	0	1		(8)
12	奥谷堀越谷	米子市	8	3	0	0	5		(9)
13	泉中峰・泉前田	米子市	21	11	1	0	9	A－0－1が2基　B－1－0が1基 C－0－1が1基	(10)
14	尾高御建山	米子市	50	44	4	0	2		(11)
15	三郎野	溝口町	2	1	1	0	0		(12)
16	清水谷	西伯町	11	10	0	0	1		(13)
17	林ヶ原	岸本町	6	5	0	0	1	A－0－1が1基	(14)
18	久古第1	岸本町	2	1	0	0	1	A－0－1が1基	(15)
19	大寺原	岸本町	5	5	0	0	0		(16)
20	百塚第1	淀江町	2	2	0	0	0		(17)
21	井手挟	淀江町	1	1	0	0	0		(18)
22	百塚第4	淀江町	20	8	0	0	12		(19)
23	大下畑	淀江町	2	2	0	0	0		(20)
24	勝負勝負の峰	名和町	3	1	0	0	2		(21)
25	茶畑第2	名和町	1	0	1	0	0		(22)
26	八重第3	中山町	29	25	1	1	2	A－0－1が1基	(23)
27	小松谷	中山町	4	2	0	0	2		(24)
28	化粧川	赤碕町	47	13	0	0	34	C－0－1が1基	(25)
29	森藤第1・第2	東伯町	32	16	0	0	16	A－0－1が1基　C－0－1が1基	(26)
30	大峰	東伯町	16	8	0	0	8		(27)
31	大畑	東伯町	26	18	0	0	8		(28)
32	水溜り・賀籠据場	東伯町	4	0	0	0	4		(29)
33	森藤第3	東伯町	5	2	0	0	3		(29)
34	青木第4	大栄町	9	8	1	0	0		(30)
35	大谷11号墳下層	大栄町	2	2	0	0	0		(31)
36	横峯	関金町	3	0	0	0	3		(32)
37	大山池、横峯地区	関金町	1	1	0	0	0		(33)
38	大山	倉吉市	4	1	1	1	1		(34)
39	イキス	倉吉市	3	2	0	0	1		(35)
40	大仙峯	倉吉市	1	1	0	0	0		(36)
41	頭根後谷	倉吉市	4	3	0	0	1	A－0－1が1基	(37)
42	後口野1号墳	倉吉市	2	1	0	0	1		(38)
43	立道東古墳群	倉吉市	6	5	0	1	0		(39)
44	中尾	倉吉市	84	31	26	22	5		(40)
45	長谷	倉吉市	57	28	6	0	21	類型不明が2基 A－0－1が3基	(41)
46	大日寺遺跡群	倉吉市	1	1	0	0	0		(42)
47	丸山	三朝町	7	1	0	0	6		(43)
48	万代寺	郡家町	53	有	?	?	有		(44)

挿表4　鳥取県における落し穴一覧表

この類型ごとの落し穴の数は挿表3に挙げているとおりである。これによると、固定土のみを使う(1-0型　4基)場合よりも、石のみを使う(0-1型　14基)場合の方が多い。杭の固定においては土よりも石の方が簡便であったのであろう。また、杭と石とを併用したもの(1-1型)は5基検出された。

鳥取県内の類例について(挿表4参照)

鳥取県内の落し穴について検討するにあたり、管見にふれる798基について分析を試みた(挿表4)。市町村別にみると、米子市(343基)、倉吉市(162基)、東伯町(83基)と続く。遺跡別にみると、米子市青木遺跡(228基)、倉吉市中尾遺跡(84基)、倉吉市長谷遺跡(57基)、郡家町万代寺遺跡(53基)、当遺跡(50基)、赤崎町化粧川遺跡(47基)、東伯町森藤第1・第2遺跡(32基)、中山町八重第3遺跡(29基)と続く。

当遺跡の類型にあてはめてみると、Aタイプが481基(総数の60%)、Bタイプ42基(5%)、A+Bタイプ(底面ピットと、底面に直接穿たれた杭痕跡の両方を持つもの、これは当遺跡には無いタイプ)が25基(3%)、Cタイプ195基(24%)、不明が55基となる。落し穴の底面に小穴を持つもの(A、B、A+Bタイプ)の方が、小穴を持たないもの(Cタイプ)よりも数が多い。

タイプ別にみると、Aタイプが多いのは、青木遺跡(185基)、当遺跡(44基)、中尾遺跡(31基)と続く。Bタイプは、中尾遺跡(26基)、長谷遺跡(6基)、当遺跡(4基)と続く。A+Bタイプは、中尾遺跡(22基)、倉吉市立道東古墳群(1基)、倉吉市大山遺跡(1基)、八重第3遺跡(1基)の4遺跡でのみ検出されている。Cタイプは、青木遺跡(43基)、化粧川遺跡(34基)、森藤第1・第2遺跡(16基)と続く。落し穴の底面に杭を突き刺したと考えられるもの(B、A+Bタイプ)の割合が大きいものは、中尾遺跡(84基中48基)である。逆に、杭を突き刺していないと考えられるもの(A、Cタイプ)の割合が大きいものは、青木遺跡をはじめ多数ある。特に青木遺跡は、総数228基を数えるが、Bタイプは1基もない。前述したように、土坑底面の土質が影響しているのではなかろうか。土質が固い場合は杭を設置しないか掘り込んでから杭を設置し、土質が軟らかい場所では杭を突き刺す。ゆえに、同じ落し穴群中に、小穴のバリエーションがみられる事もうなずける。

固定土の検出例については、当遺跡以外管見にふれないが、半截断面観察のための掘削という調査方法の有効性を、あらためて銘記しておきたい。一方、石をともなうものは若干報告されている。中でも、八重第3遺跡では、石を杭で固定した様子が明瞭な落し穴が検出されている。杭の固定材については、今後の発掘調査の展開に期待したい。

この世界に入って2年目を迎えました。教員派遣の身分でもあり(いろいろ思うことはありますが)、発掘調査については、ゼロからの始まりでした。現場が稼働しているときはそれで手一杯ですし、現場が終われば息つく暇もなく報告書の作成に入ります。自己の知識・技量の向上をはかろうにも、その機会、時間が持てなかった(を持たなかった)というのが正直な感想です。ただ、この埋蔵文化財の調査には魅力を感じます。何が出てくるか掘ってみなければ分かりません。新しい発見をしたときには大きな喜びがあります。今年度は落し穴三昧でしたが、「なんだ落し穴か」という気持ちが、「されど落し穴だ」に変わってきました。いろいろな事がありました。

最後に、尾高御建山遺跡の発掘調査の実施及び報告書の作成に際して、指導・教示・協力頂いた各位に感謝の意を表します。

(仲田)

参考文献

・稲田孝司「西日本の縄文時代落し穴弭」『論苑　考古学』(天山舎、1993年)抜刷　挿表4の作成にあたり、稲田先生の<表1中国地方における落し穴検出遺跡一覧表>を参考にさせていただいた。

・霧ケ丘遺跡調査団『霧ケ丘』(1973)

((挿表4の参考文献))

(1)『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅲ(1976～78)鳥取県教育委員会

(2)『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』(1981)米子市教育委員会

(3)『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』(1982)米子市教育委員会

(4)『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』(1982)米子市教育委員会
(5)『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』(1983)米子市教育委員会
(6)『東宗像遺跡』(1985)財団法人鳥取県教育文化財団
(7)『喜多原第2遺跡発掘調査報告書』(1987)米子市教育委員会、喜多原遺跡発掘調査団
(8)『上福万妻神遺跡』(1991)米子市教育委員会
(9)『奥谷堀越谷遺跡』(1992)米子市教育委員会
(10)『泉中峰・泉前田遺跡』(1994)財団法人鳥取県教育文化財団
(11)『尾高御建山遺跡・尾高古墳群』(1994)財団法人鳥取県教育文化財団
(12)『三部野遺跡発掘調査報告書』(1990)溝口町教育委員会
(13)『清水谷遺跡』(1992)西伯町教育委員会
(14)『久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ケ原遺跡発掘調査報告書』(1984)財団法人鳥取県教育文化財団
(15)「岸本町久古第1遺跡の「土壙」について」『水曜考古第15号』(1987)水曜考古倶楽部
(16)『大寺原遺跡発掘調査報告書』(1981)岸本町教育委員会
(17)『百塚第1遺跡』(1989)淀江町教育委員会
(18)『井手挟遺跡発掘調査報告書』(1987)淀江町教育委員会
(19)『百塚古墳群発掘調査報告書Ⅰ』(1992)淀江町教育委員会
(20)『大下畑遺跡』(1994)財団法人鳥取県教育文化財団
(21)『大山山麓遺跡群調査報告書』3(1978)鳥取県教育委員会
(22)『茶畑第2遺跡発掘調査報告書』(1990)名和町教育委員会
(23)『八重第3遺跡発掘調査報告書』(1987)中山町教育委員会
(24)『小松谷遺跡』(1975)中山町教育委員会
(25)『化粧川遺跡発掘調査報告書』(1989)赤碕町教育委員会
(26)『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』(1987)東伯町教育委員会
(27)『大峰遺跡発掘調査報告書』(1985)東伯町教育委員会
(28)『大畑遺跡発掘調査報告書』(1989)東伯町教育委員会
(29)『水溜り・賀籠据場遺跡、森藤第3遺跡発掘調査報告書』(1988)東伯町教育委員会
(30)『青木第4遺跡発掘調査報告』(1980)大栄町教育委員会
(31)『大谷11号墳発掘調査報告』(1990)大栄町教育委員会
(32)『横峯遺跡発掘調査報告書』(1986)関金町教育委員会
(33)『大山池遺跡横峯地区(落とし穴)発掘調査報告書』(1989)関金町教育委員会
(34)『大山遺跡発掘調査報告書(C・D地区)』(1989)倉吉市教育委員会
(35)『イキス遺跡発掘調査報告書』(1989)倉吉市教育委員会
(36)『大仙峯遺跡発掘調査報告書』(1990)倉吉市教育委員会
(37)『頭根後谷遺跡発掘調査報告書』(1991)倉吉市教育委員会
(38)『後口野1号墳発掘調査報告書』(1991)倉吉市教育委員会
(39)『立道東古墳群発掘調査報告書』(1993)倉吉市教育委員会
(40)『中尾遺跡発掘調査報告書』(1992)倉吉市教育委員会
(41) 竹中孝浩氏のご教示による。
(42)『大日寺遺跡群発掘調査報告書』(1993)倉吉市教育委員会
(43)『丸山遺跡発掘調査報告書』(1984)三朝町教育委員会発行、花園大学考古学研究室編集
(44)『万代寺遺跡発掘調査報告書』(1983)郡家町教育委員会